



企業訪問レポート

食品・医療分野に特化した高付加価値プラスチック容器を製造する研究開発型企业

サンプラスチック株式会社 京都府精華町

マーガリン、ヨーグルト、プリン、ゼリー等の様々な食品包装容器を中心に、医療機器容器、検査容器などのディスプレイ（使い捨て）容器を研究開発及び製造する『サンプラスチック株式会社』。

容器表面に高品位な印刷を施すIML（インモールドラベリング）技術は世界トップクラスと評され、他社を圧倒する開発力、即応力、生産技術を誇る。薄膜フィルムを用いたIML技術で複数の特許を取得するなど、高い技術力に裏打ちされた研究開発型企业として注目を集めている。

会社概要



会社名：サンプラスチック株式会社
所在地：京都府相楽郡精華町光台 1-2-9
電話：0774-39-8201
FAX：0774-34-2882
設立：1957（昭和32）年4月
代表者：代表取締役社長 桃井 秀幸
資本金：5,250万円
従業員：73名（パート含む）
事業内容：ディスプレイ包装容器の開発及び製造
URL：<http://www.sunpla.co.jp/>

食品・医療分野に特化する経営判断が転機に

同社は1957年にプラスチック射出成形加工業として東大阪で創業。日本で初めてプラスチック製のバドミントンのシャトル（羽根）を製造するなど、弁当箱や生活雑貨等あらゆるプラスチック製品の射出成形を手掛けてきた。しかし安価な中国製品の台頭により業況は悪化。そこで海外との競争を避けるため自社のフィールドを食品・医療分野に絞り、衛生性に特にこだわった高品質プラスチック製品の製造に大きく舵を切る決断をした。

現在の同社の競争力の源泉となったこの決断の理由について、桃井秀幸社長（57歳）は「日本人は食品の衛生性にこだわり外国製の食品容器をあまり好まないの、国産品にアドバンテージがある。また食品・医療分野は製品のライフサイクルが長く、設備投資費用を回収できる可能性が高いと判断したため」と振り返る。

IMLマーガリン容器



医療用輸液パーツ、カテーテルパーツ



IMLヨーグルト容器
（マガジン方式の市販IMLシステム使用）



医療用検査用品



薬瓶キャップ「正露丸」



現在同社が手掛けるマーガリン・ヨーグルト等の食品包装容器や、医療機器容器、検査容器などの製品群。



2013年に竣工した本社。2,700坪の敷地に延べ床面積約1,180坪の建屋を備え研究施設「テクノロジーセンター」と工場を併設。

町工場から研究開発型企业へ

「町工場から研究開発型企业へ」という決意を合言葉に、リーマンショックなど他社が投資を抑制していた時期にも、あえて研究開発力強化を目的とした積極投資を実施。生産性と付加価値の向

上のために製造装置の改善や開発に注力してきた。

こうした同社の研究開発への取組姿勢について桃井社長は、「不況時の投資をリスクではなく他社との差別化の手段だと考えるのが経営者の仕事。そのような経営判断を積み重ねてきたことが今日に結びついた」と説明する。

IML 技術を応用した容器製造装置で特許取得

同社における積極的な研究開発投資の成果の一つが、2009年のIML（In-Mold Labeling：インモールドラベリング）技術を応用したマーガリン容器製造装置に関する特許取得だ。

IML 技術とは、あらかじめ印刷加工されたラベルを金型内に装填し、樹脂注入と同時に容器を一体成形することで、これまでは容器に直接印刷することが難しかった写真製版などの微細な表現を可能とする加飾技術を指す。

この特許装置によりマーガリン容器への直接の高品位印刷を業界で初めて実現。これは、従来比厚さ約3分の1の超薄膜（0.02mm）ラベル用フィルムをロール巻状態で製造装置に取り付け、自動的に1枚ずつ打ち抜きながら金型に装填するという仕組みで、この他にも、デザートカップでも独自の成形技術による容器本体の軽量化や国内最薄膜のフィルム装着を実現し、原材料コストの圧縮、



IML（インモールドラベリング）技術の概念図

ゴミの削減といった環境性能も非常に高いものづくりを可能とした。「フィルムロールからラベルを都度切り出す製法を実用化した企業は当社の他になく、高い歩留まり率を実現する世界的に見ても最先端の技術」だと桃井社長は胸を張る。

こうした同社の技術力によるコスト低減効果や環境性能は食品メーカーから高い評価を得ており、受注も旺盛で生産が追いつかない状況だという。

100年後も必要とされる持続性ある企業を目指す

研究開発力を軸に100年後も社会から必要とされる持続性のある企業を目指す同社。そのためには社員全員がクリエイティブに発想できる環境が不可欠と判断し、2013年、京都府精華町に最新鋭の設備を備えた新本社工場を建設して東大阪から移転した。同時に採用活動にも力を入れ、ここ数年は毎年、有名大理系の修士課程や博士課程を修了した新卒社員も多く入社している。

「自分のやりたいことをできる環境なら社員は自発的に頑張り、能力を100%発揮する。結果として先端的な研究開発ができる」。充実した新本社を整備した狙いを桃井社長はこう語る。

今後は海外市場の開拓に向け本格的に取り組む

産業用ロボットを駆使した独自開発の最新鋭自動化ラインを工場に多数導入し、検品工程などの現場も自動化するなど、工場に携わる人間の徹底的な省力化を進めている同社だが、「ICT（情報通信技術）はただの手段やツールで、目的はあくまでもものづくりであり、基本はベタベタの製造業」だと桃井社長は自社のあり方を示す。

日本ならではの地道なものづくりを武器に今後は海外市場の開拓に本格的に取り組む方針で、「衛生的で省資源化につながる当社の技術と製品は世界レベルで必ず必要とされる」との桃井社長の確信のもとに、全社一丸となってチャレンジを続けている。

（吉村謙一、太田宜志）